

石郡英一の

“老話”

介護職に聞いてほしい
高齢者と家族の物語

第6話

わけ

原因

いしこおり・えいいち

日本福祉介護総研株式会社代表取締役会長。医療・介護運営教育コンサルタント。看護師／救急救命士。学校法人美芸学園理事。病棟看護長、老健管理部長、身体障害者療護施設事務長を経て、介護保険施設などの運営教育コンサルタントを行う会社を設立。役者かと思うほどの演技とユーモア、現場の方が、思わずうなずいてしまう体験を豊富に持っている人気の講師。主な著書に『介護現場の困ったスタッフを戦力に変える指導法』『医療依存度の高い高齢者のケア』『身体機能の低下した重度利用者のケア』『石郡流 施設看護師のデキる仕事術』（いずれも日総研出版）がある。

突然の置き手紙

「ただいま…」

山本義徳よしのりが帰宅しても、家の中から誰の返事もなかった。

返事の代わりに、机の上に離婚届が置かれていた。離婚届の妻の欄には「山本幸子」という文字が記され押印されていた。「離婚届って何？ 明日から旅行に行くんじゃないの？」

義徳はそうつぶやいた。

山本義徳は55歳で、同級生の幸子と結婚して今年で27年になる。

義徳は東京商科大学を卒業してから、都内にある地方銀行の営業マンとして就職し、31年間勤め続けている生真面目な男性

である。

幸子も高校卒業後同じ銀行に就職し、窓口として働いていた。同じ店舗に勤めていた2人は、同級生ということもあって話が合い、次第に恋愛へと発展し、28歳の時に職場結婚した。

山本夫妻は子どもに恵まれず、75歳で認知症になった義徳の母陽子を5年前に実家から呼び寄せ、去年まで3LDKの粕江市のマンションで3人で暮らしていた。

同居してからの陽子は、物忘れなどの認知症症状が年々悪化していき、去年市内のグループホームに入居した。

結婚して20余年、幸子は家庭に入っていたが、陽子がグループホームに入居してからは、介護費用を捻出するため、夫の伝手つてで再び銀行で働きはじめていた。

義徳と幸子との仲がぎくしゃくしはじめたのは、陽子と同居してからだった。

義徳は、今まで平穏に過ごしてきた生活が崩壊したのは、陽子の同居のせいだと思っていた。

義徳は離婚届の隣に置いてあった手紙に目を通した。

『一方的なお願いですが、価値観の違うあなたとは、もうこれ以上一緒に暮らすことはできません。離婚届に署名捺印をし、私の実家に郵送いただけませんか。よろしく願い致します。幸子』

「お母さんがグループホームに入居して、また夫婦水入らずの暮らしができるようになったと

いうのに、離婚したいだなんて幸子は一体何を考えているんだ！」

義徳は誰にもぶつけようのない憤りを、吐き捨てるように口にした。

7年前…

9月7日、その日山本夫妻は結婚20年目を迎えていた。

時計の針は夜の11時を回っている。テーブルには、義徳が仕事から帰ってくるのを待ちわびた、幸子手作りの自慢料理が並んでいた。

「結婚20年目を磁器婚式とか云うんだってさ。だから今日の料理は、瀬戸物に盛り付けました。義徳さんはいつまで仕事をしているのでしょうか？ いつになったら帰ってくるのでしょうか…？」

幸子がそうつぶやくと、まるでその独り言を聞いていたかのように義徳が帰ってきた。

「ただいま…」

「お帰りなさい。あなた今日が何の日だかご存じ？」

幸子は咄嗟に、思いが口をついて出た。すると、義徳の口からは幸子が期待していたとおりの答えが返ってきた。

「結婚記念日おめでとう！ はい、プレゼント」

そう云って義徳は、幸子に厚みのない長方形の包みを手渡した。『ちゃんと覚えてくれていたんだ』。幸子は待っていた疲れが一気に吹き飛んだ気がした。

「うれしい、ありがとう！ と
ころであなたお食事は？」
「もちろんいただくよ」
「料理を温め直しますから、そ
の間、お風呂にでも入ってみえ
たら如何ですか？」
「そうするよ」

義徳が風呂に向かうと、幸子
は早速プレゼントの包みを開け
てみた。
『磁器婚式にちなんだプレゼン
トかしら？』。そう思って開け
てみると、それは、味気ない
3万円分の「百貨店共通商品
券」だった。

義徳のコミュニケーションは
いつも、受け手の気持ちを察す
るキャッチボールではなく、受
け手の気持ちを無視し、ただ投
げつけるだけのドッジボールの
ようなものだった。

風呂から上がった義徳は得意
げに幸子に尋ねた。
「プレゼント開けてみた？」

幸子が苦笑いをしながらうな
ずくと、
「そう。あれで好きなものを買
うといいよ。さあて、残業でお
なかがペコペコだよ。さあ食べ
よう！ いただきます」

義徳はそう云うと、テーブル
に座って、この日のために作っ
た、幸子手作りの自慢料理を無
言で食べはじめた。

幸子は、夫婦で築いてきた
20年間の軌跡などを共に語りた
かったが、義徳からはその気配
すら感じられなかった。

幸子への^{ねぎら}の労いは、ただ「ごち

そうさま」の一言だけだった。

それら義徳の言動に幸子は、
得も言われぬやるせなさが広
がった。

『義徳さんは、仕事は残業も厭
わず真面目だけど、言われたこ
としかできないイエスマンで、
体裁をつくろうだけの人生。家
ではただゴロゴロするだけで、
食べては寝ているだけの人生。
そのくせ我が強く、一方的に自
分の意見を押し付けてくる。20
年も一緒に暮らしているのに、
未だに私の好みや趣味を知らな
い。20年間私には何の興味も抱
かない。頼りにされたこともな
ければ、褒められたこともない。
この20年間、私の人生は一体何
だったのだろうか？』

頼りにされる ということ

幸子の人生に転機が訪れたの
は、結婚して22年目の春だった。
「今日の昼間、民子（妹）から
電話があって、母が軽い認知症
になったって云うんだ。民子
は、一人暮らしをしている母の
家の近くに住んでいるから、母
の様子を定期的に見に行ってく
れていたんだけど、最近同じこ
とを繰り返し言うようになった
り、火を付けっぱなしにして鍋
を焦がしたり、持病の心臓の薬
を飲んだ記憶をなくしたりして
いたみたい。それで心配になっ
て、病院に連れて行って検査を
受けた結果、軽い認知症だと診
断されたらしい。医師が云うに

は、現在の母は、誰かが面倒み
なければいけない状態らしいん
だ。そこで、妹は嫁いでいるし、
長男の僕が面倒をみなければなら
ないと思うんだ。迷子になっ
たり、火事を起こしてしまった
りしては困るので、できるだけ
早く、この家で母と同居したい
と思っているけど、いいかな？」
「そんなことを急に言われても
困ります」

咄嗟に幸子は抵抗したが、義徳
の意思はゆるぎないものだった。
「じゃあ、一人暮らしの母の面
倒を誰がみるの!? 実家に一
人ぼっちで置いておけばいいっ
て云うの？ 家^{うち}しか面倒をみる
者がいないのだからよろしく頼
むよ！ それに、面倒がみられ
なくなったら、施設に入っても
らえばいいのだから、そんなに
心配しなくても大丈夫だよ！」

結局幸子は、義徳のドッジボー
ルコミュニケーションに押し切
られ、陽子との同居をししぶ
承諾した。しかし、この時幸子
の胸には、姑との同居に対する
不安や、認知症に対する得体の
知れぬ不安が膨らんでいた。

ところが、実際に陽子との同
居生活が始まると、すぐに幸子
の抱いた不安は杞憂に終わるこ
とになる。

なぜなら、同居を機に不安や
依存が強くなった陽子は何でも
幸子を頼るようになり、それに
応える幸子に、頼りにされてい
るという満足感が広がったから
である。

結婚してから義徳に関心を寄せてもらえず、頼られたことなかった幸子に、陽子の存在は自信と生き甲斐をもたらすようになった。陽子のお陰で、幸子の毎日は充実していた。

「お義母さん、お食事はお口に合いますか？」

「はい。幸子さんの料理はすごくおいしいね」

「お世辞でも嬉しいですよ」

「お世辞じゃないですよ。毎日食事の準備をありがとう。幸子さんに任せておけば安心だわ」

認められたり褒められたりすることに飢えていた幸子は、陽子の感謝の言葉が心の琴線に触れた。それが姑からとなれば、これ以上にうれしいことはなかった。

陽子は時折おかしなことを口走るが、幸子は義徳のドッジボールコミュニケーションに慣れていたせい、戸惑うどころか、本当の母親のように受け止めることができた。

「幸子さん、そろそろお昼ご飯でもいただこうかしら？」

「お義母さん、お昼ご飯って…。今はもう夜の9時過ぎですよ。それに7時過ぎに夕食は召し上がったじゃないですか…。明日も腕に寄りをかけてお作りしますからね」

しかし義徳はそのような時、母の症状に辟易するのだった。

「さっき食べたじゃないか！ 母さん！」

「年寄りだから、忘れるのは仕

方ないのよ」

陽子がつくろうと、義徳は必ず反応した。

「毎日、毎日いい加減にしてくれよ！」

「義徳さん怒らないで。お義母さんが可哀想じゃない」

幸子は次第に、陽子を責める義徳に嫌悪感を抱くようになっていった。

BPSDの悪化

同居して4年も経つと、陽子は被害妄想がよく出現するようになっていった。心配した幸子が認知症外来に連れて行くと、認知症の症状が進行していると診断され、ドネペジルやメマンチンのほかに向精神薬が追加されることとなった。

その日の陽子も、被害妄想が出現していた。

「幸子さん、私のタンスに入れておいた300万円を、あなた盗ったでしょ！ 今すぐ返して！」

幸子は、今までにない陽子の易怒的な態度に戸惑いを隠せなかった。

「お義母さん、私はお金を盗っていませんよ。思い出しながら一緒に探しましょう」

幸子はタンスの中にあるというお金を探しながら、話題を変える努力をした。

「お義母さん、この花柄のお洋服可愛らしいですね。今日のお買い物は、これを着て出掛けてみませんか？」

しかし、その日の陽子はこ

わりが強く、話題を変えてもすぐに幸子に突っかった。

「お金返しなさいよ！」

その夜幸子は義徳に、昼間の陽子の被害妄想について説明した。幸子は、陽子を責めるのではなく、どうやってかかわっていくのがよいのかを相談したかったのだが、義徳は陽子の施設への入所を即断した。

「それはすまなかった。毎日世話をしてくれている幸子に、そのような失礼なことを云うようでは、もう限界だな…施設に入ってもらうしかないだろうね」

「ちょっと待ってください。施設だなんて、お義母さんが可哀想です。お義母さんは勘違いなさっているだけよ」

「僕は君のことを守ってあげたいんだよ。母のことで、君には本当に迷惑を掛けてしまったけど、もう心配しなくていいよ。明日ケアマネジャーに相談して、今度の日曜日にでも認知症専門の施設に見学に行ってくるよ」

「私まだお義母さんを家でみられますから、大丈夫ですよ」

幸子は懸命に義徳を説得してみたが、義徳には馬の耳に念仏であった。

その週末、義徳はケアマネジャーから紹介のあったグループホームを回り、自宅から車で10分ほどのところにあるグループホームへの入居を勝手に決めてきた。

その上次の日には、グループホームの入居費用が月18万円

かかり、陽子の国民年金では10万円以上も足りないため、共働きしなければ払えないとの理由で、幸子の了解も得ずに勤務先の銀行の支店長に掛け合い、幸子を店舗内のコンシェルジュとして採用してもらおうよう掛け合ってきたのである。

幸子は憤懣^{ふんまん}やる方ない思いであったが、陽子のためになるのならと自分に言い聞かせ、義徳の云うことに従った。

27年目の決断

陽子がグループホームに入居してから、幸子は心にぽっかり穴が開いたようだった。幸子にとって陽子と暮らした4年間は、結婚してからの27年間の、どの期間よりも充実した月日に思えた。

今の幸子は、週に一度、土日で行う陽子の外泊が何よりの楽しみだった。その楽しみを除いて、幸子の心は抜け殻のようであった。この抜け殻のような心を忙しさで埋めるために、幸子は朝起きてから夜寝るまで、身体を酷使しながら休むことなく働いた。

その頑張りを義徳は、「幸子は母や私のために身を粉にして働いてくれるようになった。母を施設に入居させたことで、夫婦の絆が深まった」と解釈していた。しかし実際は、陽子を媒介として、かろうじて首の皮一枚でつながっているだけだった。

そしてついに、その首の皮一枚が剥がされる時がやってきた。

それは、週の中半^{なかば}木曜日の夜、義徳が幸子に云った言葉が引き金となった。

「いつも母のために一生懸命努力してくれてありがとう。明日は母の外泊を取りやめて、夫婦水入らずの熱海旅行でもしよう。温泉に浸かって、おいしいものを食べて、バナナワニ園にでも行こうじゃないか」

「私は結構です。お義母さんを迎えに行きます。旅行はあなたお一人で行かれたらいいじゃないですか？」

「何むきになっているんだよ。楽しくやろうよ。ねっ」

「ですから結構だと申し上げているのです」

「なぜ!? 実はもう旅券も宿も2人分確保してあるんだよ」

『ドッジボールコミュニケーション…』心の中で幸子は、そうつぶやいて、鼻で笑った。

しかし、その笑顔を了解の笑顔と誤解した義徳は、幸子を喜ばせるつもりで、幸子の目の前でグループホームに電話をかけた。「いつもお世話になります。山本です。明日の母の外泊は、家庭の都合で取りやめますのでよろしくお願い致します」

電話をかけ終わった義徳は、『もうこれで大丈夫だよ』と云わんばかりに幸子に微笑んだが、義徳の目の前には、涙をため、鬼のような形相で義徳を睨み付けている幸子の眼差しがあった。「どうしたの？」

幸子は返事をしなかった。そしてそれ以後、幸子は二度と義徳の問い掛けに応じることはなかった。

金曜日の朝、いつもと同じように朝ご飯を作り、洗濯をしてから、幸子は出掛けて行った。義徳は未だに幸子の気持ちが理解できずにいた。

義徳は『まあ、今夜もう一度説得してみるか』と、高をくくって出勤した。

「ただいま…」

その夜、山本義徳が帰宅しても、家の中からは誰の返事もなかった。

返事の代わりに、机の上に離婚届が置かれていた。離婚届の妻の欄には「山本幸子」という文字が記され押印されていた。「離婚届って何？ 明日から旅行に行くんじゃないの？」

幸子の心は義徳からすでに旅立っていた。